

環流



第183号 令和4年12月20日

<目次>

生徒の活動：銭函中学校……………P1
 巻頭言：田中 孝二 校長……………P1
 教育実践紹介：道徳教育研究会……………P2
 第13次研究のすすめ……………P3
 教育研究所情報：全国教育研究所連盟研究協議会（札幌大会）より……………P4

↓ 社会科の授業（公開研究会）で新聞の内容について討論する3年生



↑ 学校付近の海岸でボランティア活動（ゴミ拾い）を行う生徒会役員

生徒への最高のプレゼントは、「生きる力」を育む教育課程

小樽市立銭函中学校 校長 田中 孝二



学習指導要領解説：総合的な学習の時間編に、「学校の教育目標を教育課程に反映し具現化していくに当たっては、これまで以上に総合的な学習の時間を教育課程の中核に位置付けるとともに、各教科等との関わりを意識しながら、学校の教育活動全体で資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントを行うこと」とある。

変化の激しい時代を生きていく「Z世代」の生徒たちが、学校で「何ができるようになったか」を心から実感できるようにするための、総合的な学習の時間を中核に据えた教育課程の編成が、本校の喫緊の課題であった。

そこで、地域連携研修を活用し、本校教諭2名が、先進地の高知市を視察するとともに、特別活動とのねらいの違い及び関連性を明確にするため、行事担当の教諭1名が全日本中学校特別活動研究会東京大会に参加、さらに小中一貫した教育課程の在り方を学ぶため、教頭が京都の小中一貫校等の視察を行った。

また、校内の教育課程検討委員会等を随時開催し、地域の人的・物的な資源の有効活用と教科等横断的な視点により、教育課程の改善・充実に係る議論を重ねるとともに、コミュニティ・スクールを活用し、地域の教育資源の開拓と社会に開かれた教育課程の実現に努めているところである。

今後も引き続き、生徒たちが大人になって活躍する姿を、学校・家庭・地域でしっかりと共有し、生徒への最高のプレゼントを創り上げていきたいと考えている。

< 研究交流団体の実践紹介：小樽市道徳教育研究会「みちの会」 >

(会長：小樽市立稲穂小学校長 大坂 充)

「主体的に考えを深め合う児童・生徒の育成」

～魅力ある道徳の授業づくりを通して～

1 はじめに

現行の学習指導要領改訂において道徳は教科化され、より一層道徳科の重要性が求められている。本研究会は、北海道道徳教育研究会（北道研）の小樽支部として、研究主題「主体的に考えを深め合う児童・生徒の育成～魅力ある道徳の授業づくりを通して～」の下、研究活動を進めている。

2 研究内容

(1) 児童・生徒の心に響く魅力的な教材の選定・活用・開発について

魅力的な教材は、児童の主体的な学びを引き出すことができる。教科書の効果的な活用は基より、小樽の地域素材を生かした教材の開発も進めている。これまで、内容項目「C伝統や文化の尊重、国や郷土を愛する態度」の教材として、「おたる雪あかりの路」「松前神楽」「小樽運河保存運動」などを開発し、実践検証してきた。地域素材を活用したことにより、児童・生徒がより自分ごととして道徳的価値を捉え、郷土に対する考えを深めることに効果的であった。



(2) 主体的・対話的で深い学びにつながる学習過程の工夫について

わかりきったことを発問するのではなく、子どもたちが「どういうことだろう」「なぜだろう」と深く考えることのできる発問について研究を深めてきた。「話し合う価値のある発問」「道徳的価値について考えることができる発問」をすることで、児童・生徒一人一人が深く思考することができる。学級の実態と教材の特質を踏まえながら、より適切な発問を設定し、授業実践につなげている。



3 研修会の実施

夏季と冬季の2回、研修会を実施している。夏季は授業づくりや他の教育活動との効果的な関連についてなどを研修している。冬季は、研究授業を実施することで、実践を通じた研修を行い、研究内容について協議し、改善を図ってきた。また、令和元年度及び4年度は全道大会、令和3年度は全国大会で、本研究会の研究を提言する場をいただき、広く意見をいただいたところである。

4 終わりに

小樽市には、歴史的建造物や小樽の発展に関わった人物など、教育資源が豊富である。今後も、小樽市の児童・生徒の道徳性の育成に向けて、地域素材の教材化や、児童・生徒の考えが深まる学習過程の工夫について研究を深めていきたい。

(執筆者：事務局長 齋藤 直哉)

第13次研究1年次目の研究をすすめています

小樽市教育研究所では、月に1回研究員による会議を開き、第13次研究1年次目の研究を進めています。昨年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から研究員会議や検証授業をほとんどリモートで行っていましたが、今年度は今のところ対面で実施し、研究の発展・充実に努めています。また、昨年度リモートで行った経験をもとに、ChromebookをJam boardや資料の交換に利用するなど効果的に活用しています。

これまでの会議の内容の一部を紹介します。各学校の研究とのかかわりもあると思いますので参考にさせていただければ幸いです。

○今年度の研究の取組について（一部抜粋）

今年度の研究内容は、研究主題を踏まえ、「研究内容1：『個別最適な学び』の工夫」と、②「研究内容2：『協働的な学び』の工夫」として進めています。研究を進めるに当たり、これらの内容が捉えにくい（イメージしにくい）ということから、それぞれを具体的な姿で示すことにしました。

○研究内容1【「個別最適な学び」の工夫】

①視点1：子供の学習進度や学習到達度に応じた指導方法の工夫

- ア 解決方法の選択，解決までの筋道の設定等に係ること
 - ・解決方法を選択する場面を設定
 - ・自力解決時のヒントを段階に応じて提示 など
- イ 問題の工夫等に係ること
 - ・難易度を変えた複数の適用問題から選択
 - ・振り返りの場面での定着を図る際の質・量の選択 など
- ウ 評価の工夫に係ること
 - ・ルーブリックの作成（教師と子供で評価を共有） など
- エ 学習形態等の工夫に係ること
 - ・学び合いのための交流の場の設定 など



②視点2：子供一人一人が自らの学びを発展させたり，探究したりする学習を位置付けた指導計画の工夫

- ア 振り返り等の工夫に係ること
 - ・学びを深める「なるほど」、学びを広げる「だったら…」の視点を明確にした振り返りの場の設定
 - ・単元全体を振り返る場を位置付けた単元計画の作成
 - ・前時の振り返りから本時の最初の振り返りにつなげる工夫 など
- イ ゴールの見通し等の工夫に係ること
 - ・単元の導入部でのオリエンテーション的な時間の設定→ゴールへの見通し
 - ・子供がゴールを見通せる「学習計画表」や「ルーブリック」の作成 など
- ウ 課題の設定等の工夫に係ること
 - ・実生活に結び付いた課題の設定
 - ・気になったことを考えたり，調べたりする場面の設定 など

○研究内容2【協働的な学びの工夫】

(1) 視点1：子供が異なる考え方を組み合わせ、よりよい学びを生み出すことができる指導方法の工夫

- ア 交流の工夫等に係ること
 - ・効果的な対話場面の設定（交流の目的を明確にする，立場を明確にして交流，など）
 - ・まとめにつながる交流の焦点化（共通点など）をコーディネート
 - ・交流の成果が表れる発表方法の工夫 など
- イ 形態の工夫に係ること
 - ・多様な考え方を引き出すような問題提示や交流方法の工夫（ペア，グループ，全体）
 - ・意見のグルーピングの仕方の工夫 など

教育研究所情報

令和4年度全国教育研究所連盟研究協議会（北海道大会） 兼77回北海道教育研究所連盟研究発表大会（札幌大会）より

標記の研究発表大会（10月28日）について、本研究所より佐藤冨研究員（菁園中）がZOOMにより参加しましたので、概要の一部について紹介します。



1 基調講演 「子供を主語にする学校をつくるために」

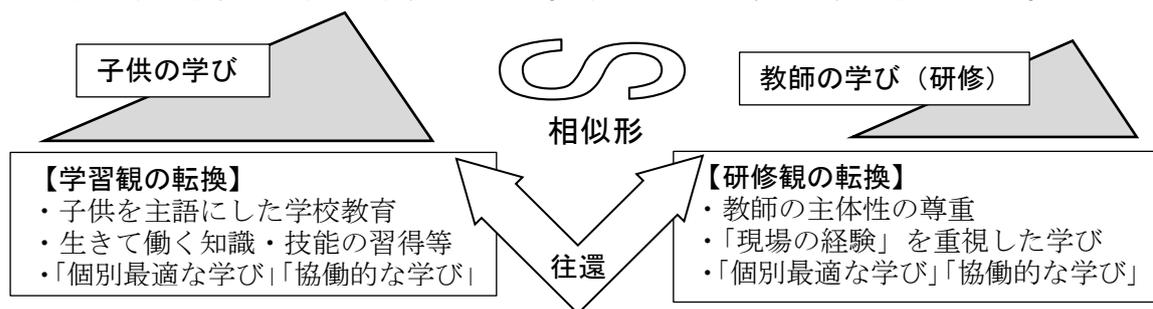
講師：独立行政法人教職員支援機構 理事長 荒瀬 克己氏

(1) 学習指導要領と「令和答申」

- 子供が自立した学習者として学び続けるように、「個に応じた指導」を充実することが大切である。↳（自分で考えて、判断して、行動できる能力、しようとする資質を育む）
- 「個に応じた指導」（指導の個別化+学習の個性化）を学習者の視点から整理した概念が「個別最適な学び」である。

(2) 新たな教師の学び

- 研修履歴を活用していくことが必要となる。教師が自己のキャリア発達（役割の自覚・自分らしさの発揮）のために学びの記録（やさや可能性、課題の発見・確認）に基づいて、学びの自己管理と自己評価を行う。
※すべてを記録する必要はない。 ※自分の索引として利用できるようにする。
- 子供の学びと教師の学びは相似形である。今までの研修観の転換が必要である。



(3) 一人一人の自立と評価

- 「与える教育」を続ければ、考えない子供が出来上がる。「主体的・対話的で深い学び」の実現には、「教師が教える」から「生徒が深く学ぶ」への転換が必要である。
- 自己肯定感が自立へつながる。評価は、子供に自分のよさや能力を気付かせるものであり、自己肯定感を支えるものである。適切な評価を積み重ねることによって、自分で気付き、考え、行動できる人間へ成長し、自立した人間へと成長する。
- 今までの評価は、記録に時間や労力が割かれ、学習改善につながっていないケースが多いことが課題であった。これからの学習評価は、指導に生かす評価を充実させることが必要である。

上記のほか、「教師の学びと実践を促すための学校と教職員への支援の在り方」について提言とグループ協議がありました。その中で、独立行政法人教職員支援機構「学びのイノベーション事業」実践研究報告書にある「学校におけるICTを活用した学習場面」について説明がありました。

【一斉授業】挿絵や写真等を拡大・縮小、画面への書き込み等を活用して分かりやすく説明することにより、子供たちの興味・関心を高めることが可能になる。

【個別学習】デジタル教材などの活用により、自らの疑問について深く調べることや、自分に合った進度で学習することが容易になる。また、一人一人の学習履歴を把握することにより、個々の理解や関心の程度に応じた学びを構築することが可能となる。

【協働学習】タブレットPCや電子黒板等を活用し、教室内の授業や他地域・海外の学校との交流学習において子供同士による意見交換、発表などお互いを高め合う学びを通じて、思考力、判断力、表現力などを育成することが可能になる。